

世界の海事動向の分析 ～新型コロナウイルスによる影響を捉える～

(研究期間：平成13年度～)

港湾研究部 港湾計画研究室

研究官 上田 剛士 (室長 博士(工学)) 安部 智久



(キーワード) PIERSデータ、Lloyd'sデータ、コンテナ貨物量、船舶動静

2.

社会の生産性と成長力を高める研究

1. はじめに

当研究室では、我が国の港湾政策の立案に資する海運の動向を的確に捉えるため、これまで複数の海事ビッグデータを収集し、分析・蓄積を行ってきた。2020年以降は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により世界の海上物流が大きな影響を受けているため、それに着目した継続的な分析を行っている。

2. 海事ビッグデータ (PIERS・Lloyd'sデータ)

本研究に用いる主なデータは、アジア北米間の輸出入コンテナ貨物を扱うPIERSデータと、全世界の船舶の動きを扱うLloyd'sデータである。PIERSデータは、米国税関から公表される情報を元に作られたデータベースであり、コンテナ貨物の発着地、品目、数量等を含んでいる。Lloyd'sデータは、英国のLloyd's社が収集・提供するものであり、船舶がいつこの港に入港/出港したかや、その船舶の諸元(全長、幅、満載喫水等)を含んでいる。

3. 新型コロナウイルスの影響の分析例

分析例として、2020年のアジア諸国から米国への輸出コンテナ貨物量の前年比を図-1に示す。各国ともに上半期に急減少が見られ、これはコロナウイルスの流行の時期と概ね一致している。その後の回復状況は国によって異なるが、対前年比1を超える国が見られる。また、図-2は、2019、2020年の世界の港湾における大型クルーズ船の寄港回数であるが、2020年3月頃より急減して未だ回復していないことが分かる。この他、コンテナ貨物の積替え港の変化や品目別の貨物量変化の特徴、またクルーズ船以外の船種の寄港回数変化、秋以降の貨物増加時の港湾

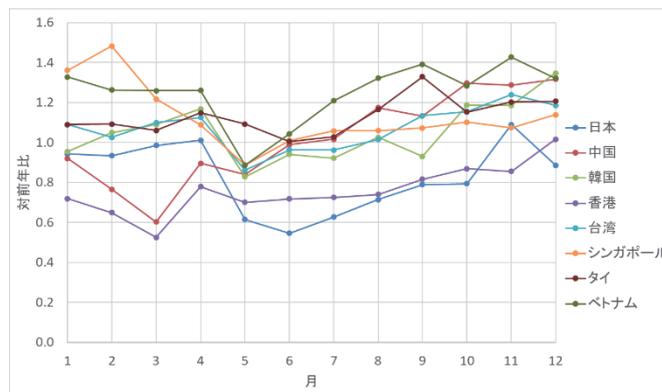


図-1 2020年のアジア各国の対米輸出貨物量

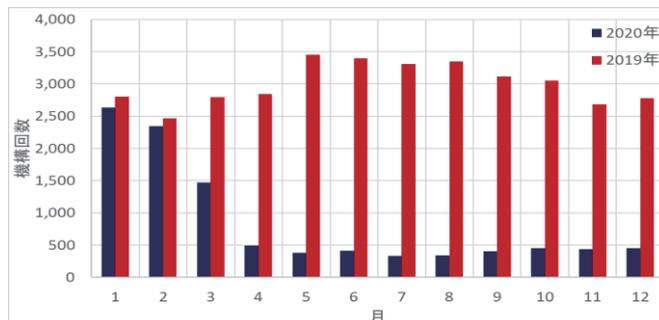


図-2 大型クルーズ船の寄港回数の推移

滞在時間の変化等の分析を行っている。

4. 今後の展望

今般のコロナ禍により、外国との人流・物流が制限されても社会活動を維持できる物流の重要性が再認識されており、今後国際物流における大きな変化も想定される。それらの影響をいち早く捉えるため、当研究室では継続的なデータの収集と分析を行っていく予定である。

☞ 詳細情報はこちら

1) 国総研資料No. 1062, No. 1017, No. 965等
<http://www.ysk.nilim.go.jp/kenkyuseika/kenkyusyosiryou.html>